



繪本忠臣藏

四

中村進午文庫
文庫5
702
4





中村天来氏

昭和三十七年十月二十七日
法學部研究室より移管

昭和三十七年十月二十七日
法學部研究室より移管

文庫5
702
4

昭和五十一十月二十七日
中村天来氏贈

昭和三十七年十月二十七日
法學部研究室より移管

○ 國志摩八子奈波傳

國志摩皆城と成る圖

○ 松村又子が傳

○ 不破門右衛門傳

○ 不破弘行の圖

○ 不破到深念



繪本忠臣藏卷之四

大星力彌弒諸士

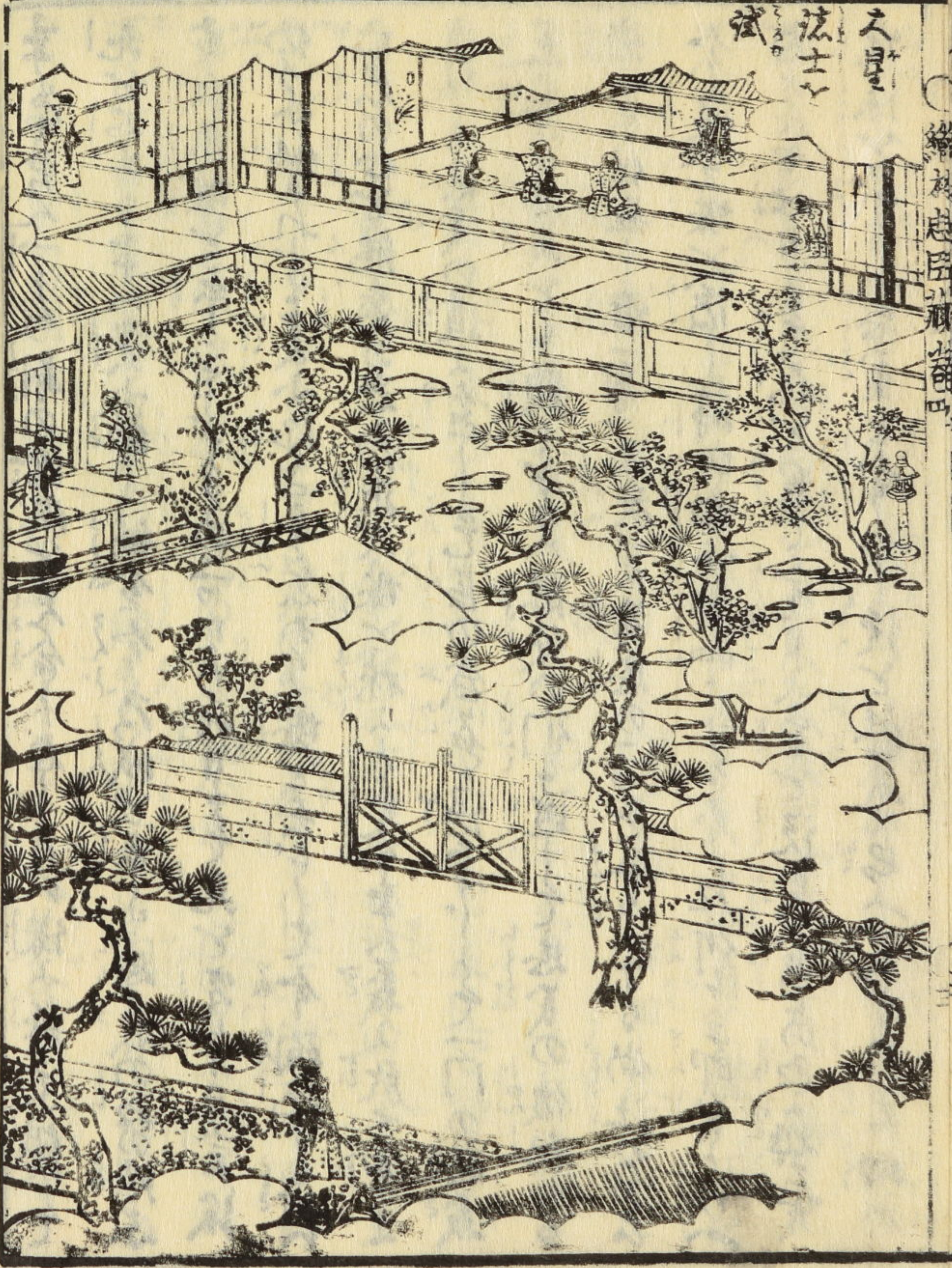
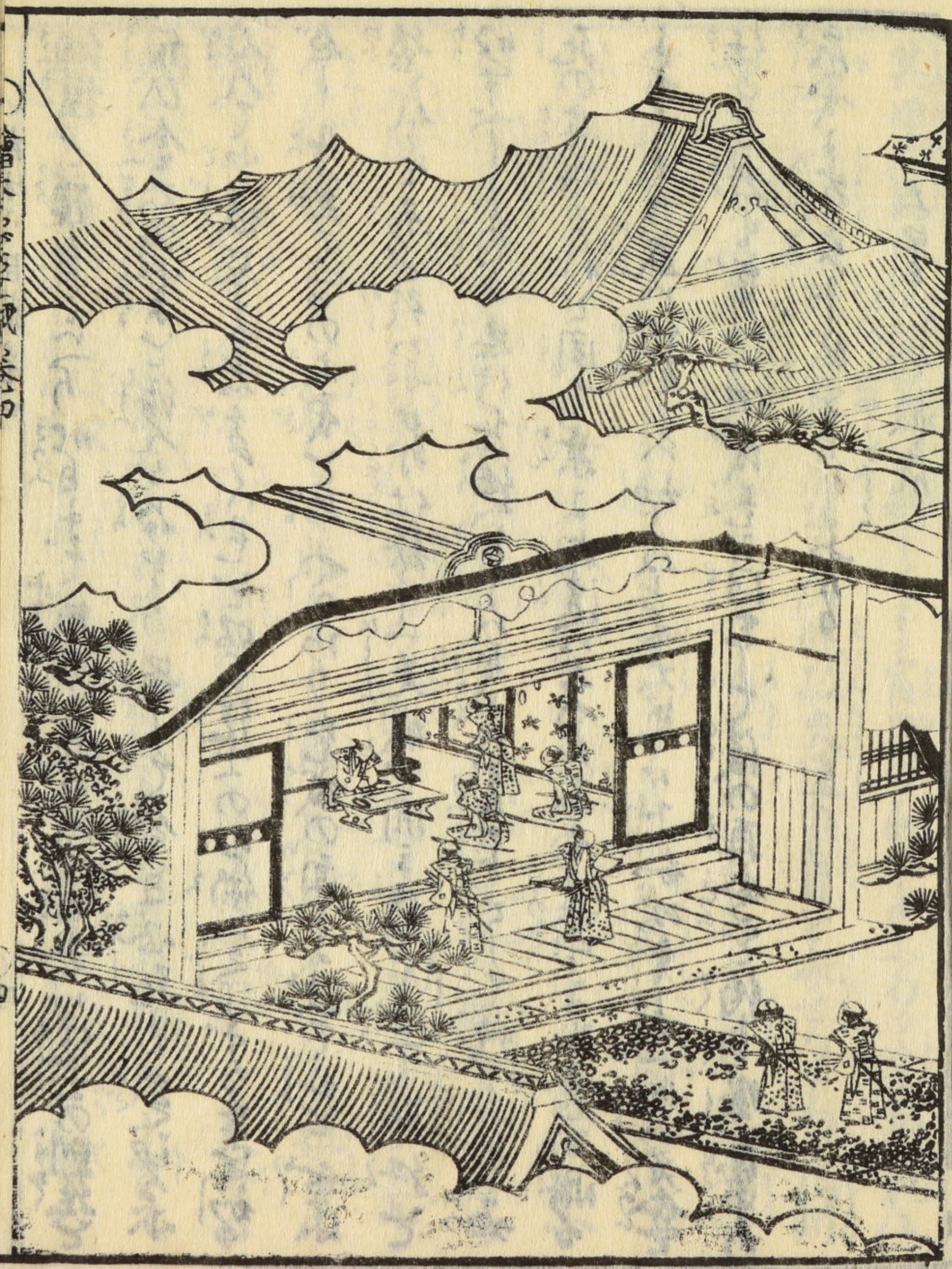
早稲田大学
圖書館藏書

早稲田大学
圖書館藏書

去程小四月十二日大星は舟に船その要明より赤尾の城に相つり
村中幼助を命じて急ぎと記を殉死一黨の半とゆるし今迄の
義士我先と恨面を記して大星間を走りたる所城中小集りる
人殺三百七名餘人ありしが今日殉死の期となりて僅六名三人を集り
々付大星とんと小畑と殺せざるも理かり既去年の刻より及ぶと
維新の集り者おれれば奈波人殺は是までと定むるなり門と
困むるもせぬ城門と須らくる誠を今日宅城の人をばせて再び
ゆきしと必死と定めし形勢の勇まむは社に之よりたるは有つて
城門と相く者あり寺岡平ちら城門のくろ戸と困と誰人ぞと

ありし先年御の幸有て浪人せし圍壁修を美山圍は命小圍
 徳川実録の凶變と少回恩と云ふは器具と携へ城に入て傷れ
 せん事とぞしりたる中長助と云ふは細有て城門閉
 じは是より口を閉と潜戸の隙より門と隔て對面し人の志と
 守て大に慮下て云々の者義と重んずるも是れを本社の志と
 辨ぬるを以て今浪人と云ふ集る則の上と後と云ふ也
 ありしそ有て附して城中に入れば武士も今も冷方好く幸
 ぞゆりたるまじり大星八元の屋敷に法士を向ひて云
 ぬ今日の時城滅して忠心の誓ひ切れしに家長一ツの
 所はと云ふ後と云ふ一果は細有て一先城と開て幸と濟し
 りん今亡きの嗣令別家と云ふも自然城の家と云ふ也

幸やありし一まづ嗣の浮況と云ふ命と云ふは謀と殺す然と
 死と云ふ事ハまじり後令今方城と云ふも忠義の心の終ふ
 むべし謀と云ふと云ふもの二つなり皆さて死と究今日言
 ぬる小細と云ふは愛小細と云ふ意あり謀と云ふと云ふ今殉死する時
 亡きの心と徳事の若くは死に謀と云ふと云ふ事ハ義と云ふ
 されども忠義の道と云ふは是居の武名と云ふと云ふ一門の義
 忠家の再興とも願ふがらハ將使の們道と云ふ忠義の後継者
 云ふは仕立と云ふは云ふに於ては義忠の二つを今も守る術社と云
 今彼令謀と云ふ一門の如しと云ふは云ふに何ぞ即義と云
 たりんや昨日まで死と云ふ今日又生と云ふ是れ武士の乃に徳
 徳と云ふは忠義と云ふは云ふに終と云ふは云ふは云ふは云ふ



大目
法士
武

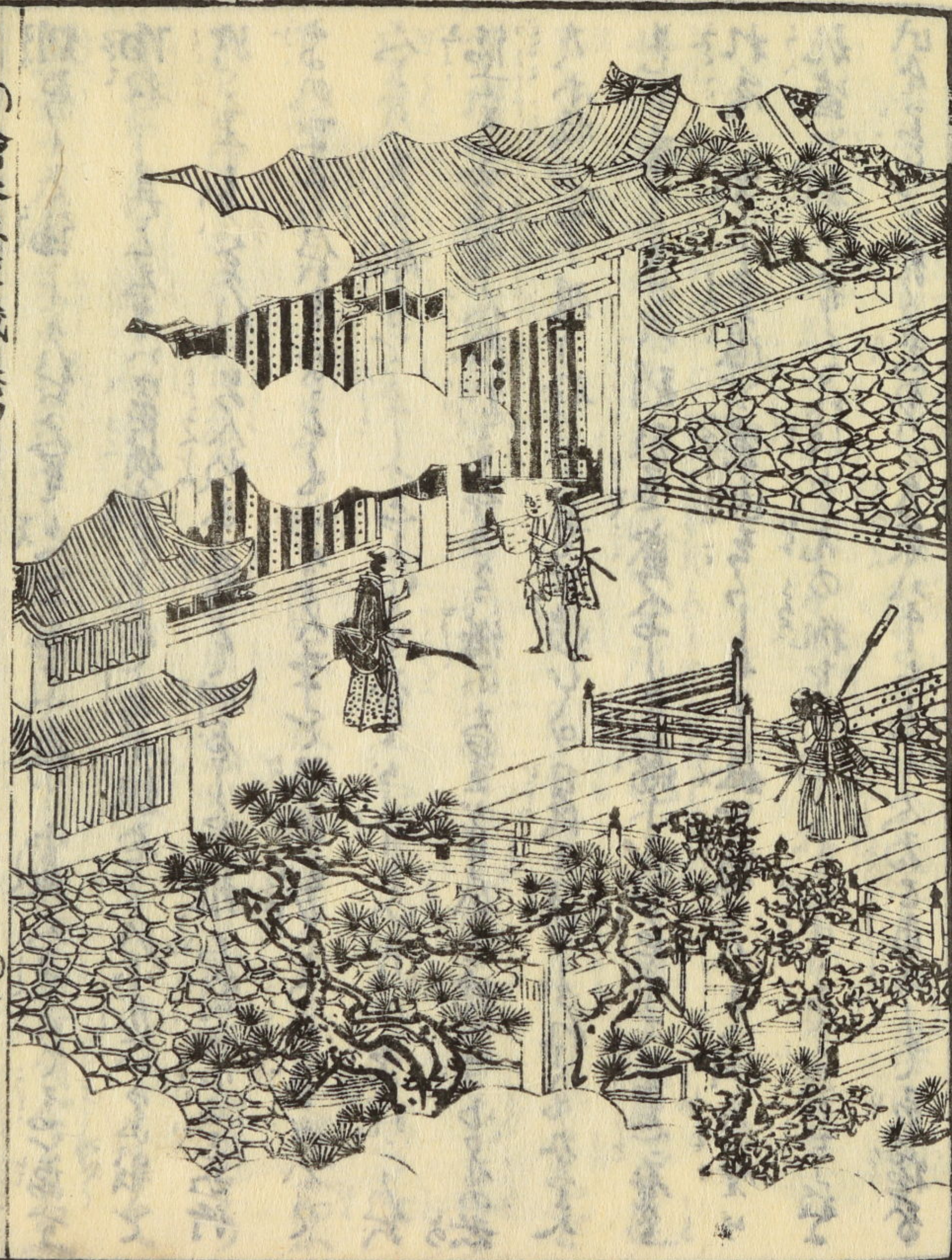
繪本
巻之
四

細謹と顔とより時自まで城中小死せんといふ者ハ法士の刑徒と
 伺ハ金之の少事と法人がゆかり果して今日必死と定むる小
 及んで也城をさる者多く是と明て法士の刑徒と定むる事と明
 だし居て一町の太夫と思ふゆかりを城の面より放て紅と葉
 然れども未だ死なず外は縁一先城を用い後一途く麻科と
 明すナドと内は忠信とゆかり人夫言と事とて後とて必
 死の英雄これと明て葉と相違ひあることと其中にも是と明る
 事とのわり感へ何れもかかぬども大星が下か決身と一向小舟
 任する者も皆何れも何れも是と明て後の再會と約し城と葉の
 氣をたれ下城とせしむる

大星仁心救ふ

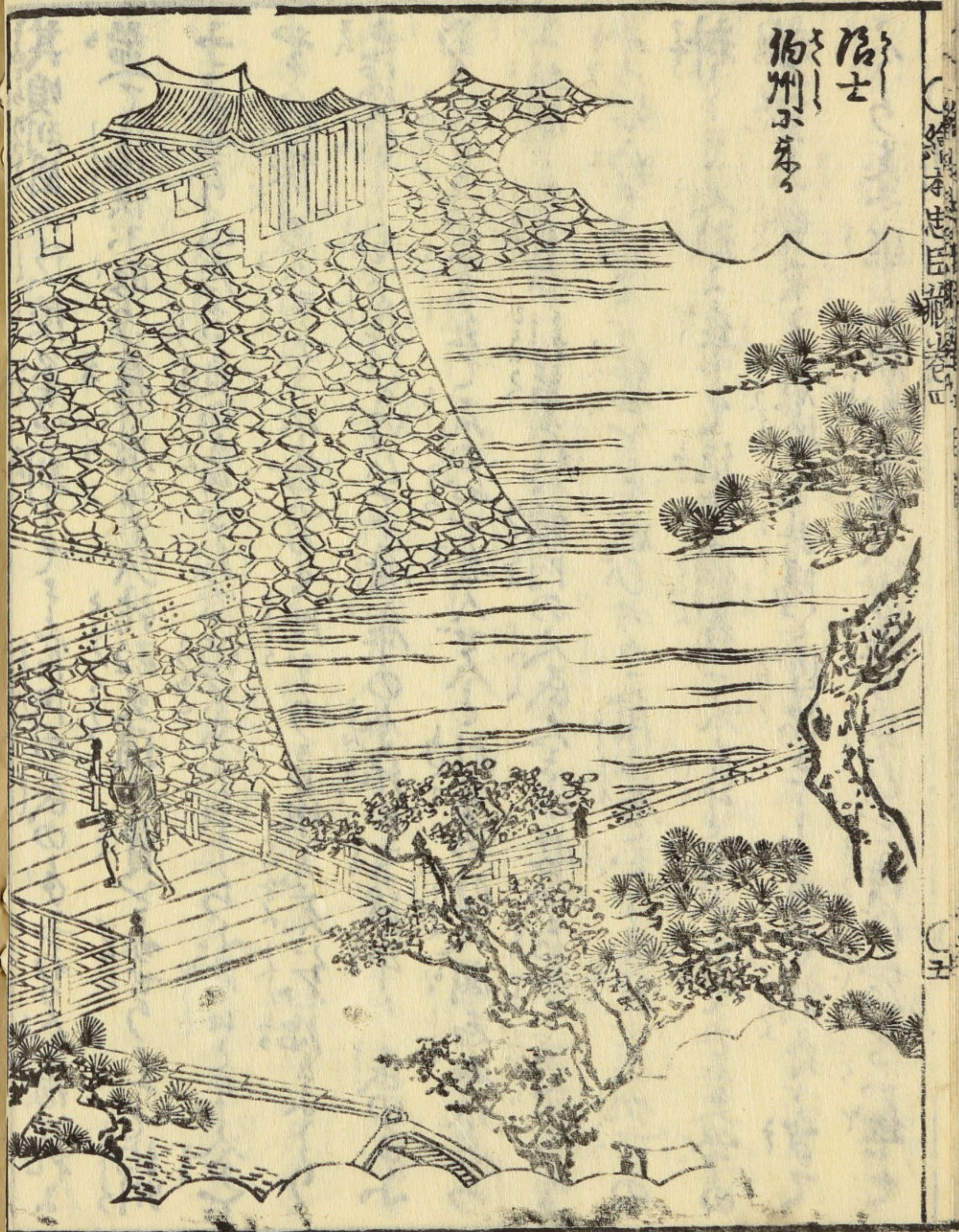
其頃列國の法侯衆と制して官内の民のあむる令後をれは
 整て法侯小取り幕府中び佐助交通の費とあせりうて伯州
 子も又よりはたさ貞の妾よりて他衆よりまらふ互たとなり令と
 せれ領内の人民をた思ふるも理なりは雁元來仁心海より
 之氏衆一令を行とゆびて府庫の令張のき法斗り民のさふ
 あり他衆と交きて流の心と每人ごと札座の及人國を聲公若ら
 又協國と是と別習をれ領内の人民をさふ收ひあ一と城下も事
 令後たそ大星が仁心と收びるる又用意をかりて法士の刑徒の
 料とて人殺しをせり法士は刑徒と斗ふ時大星を交きて
 者大星の會衆を大星は其場と法士は刑徒と斗ふ時大星を交きて
 人より先逃れ配分と事ハ雁が斗いと清く知行さふ事と

金太郎の墓



〇五

居士
伯州



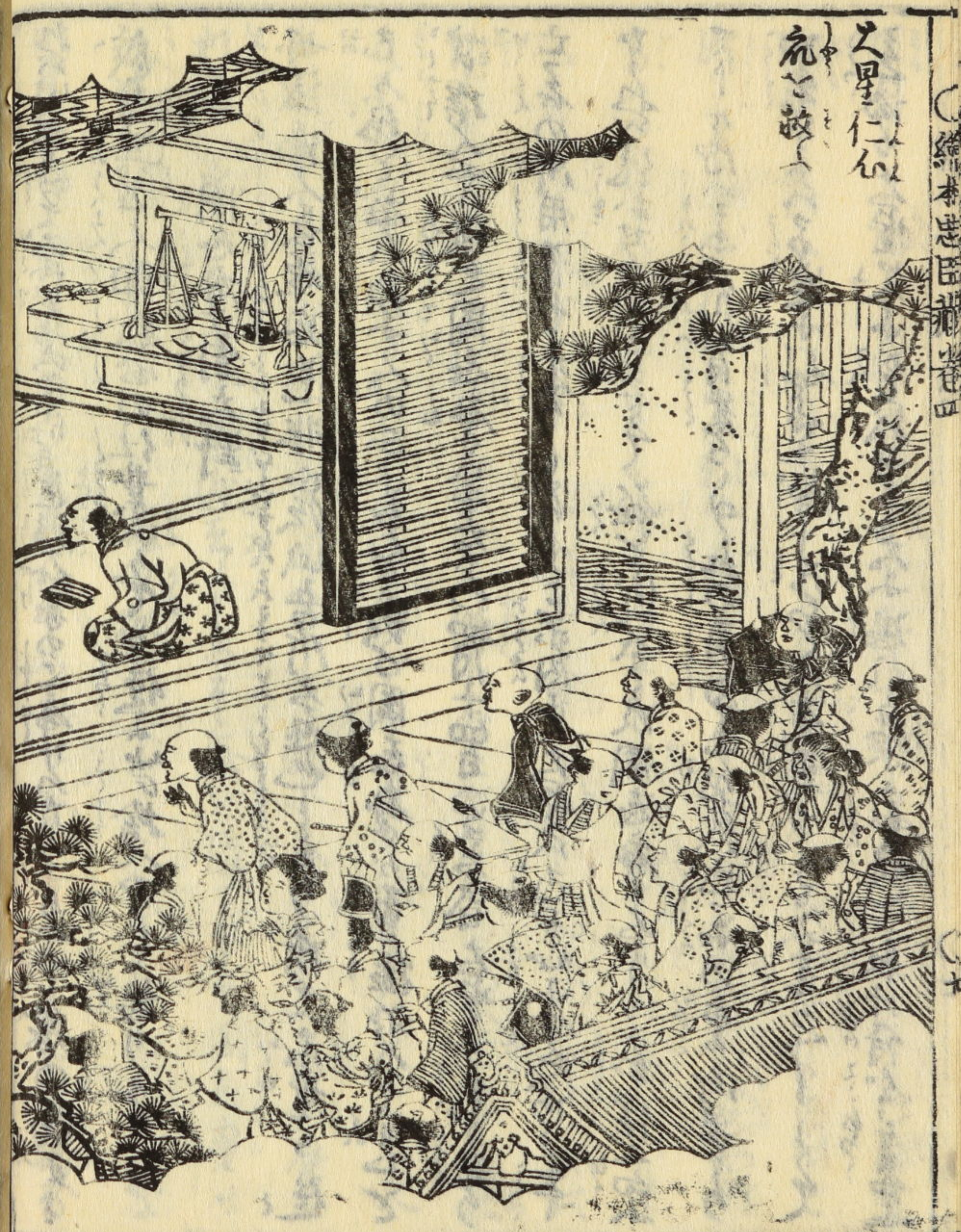
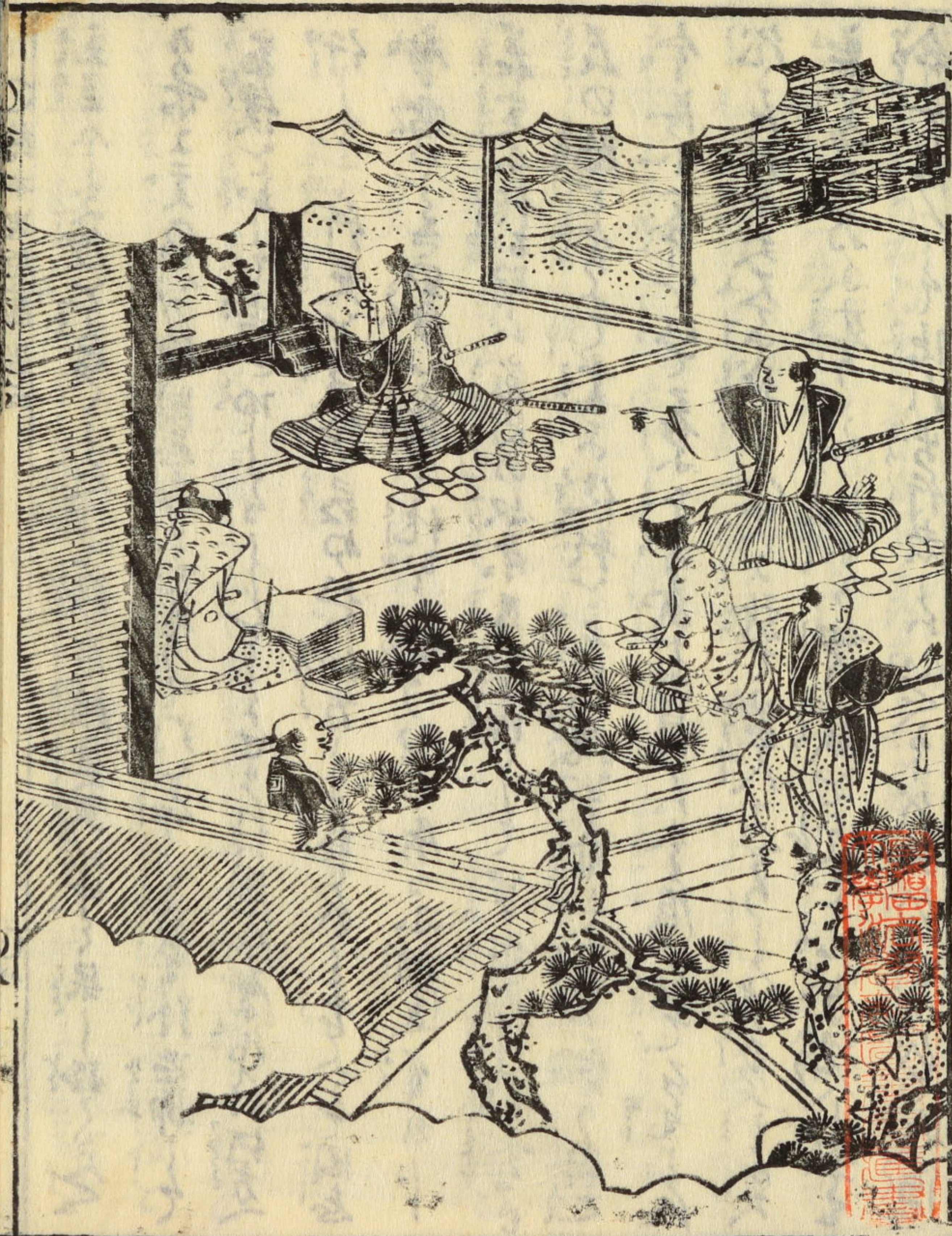
金太郎の墓

〇五

別をいふと後ト云はた聖之と云ふ事小徳大徳ト云ふ事
向於一其上云々の家徳まのしと云ふ事小徳大徳ト云ふ事
行ふ事多きをいふ事人教不徳ト云ふ事小徳大徳ト云ふ事
この事小徳大徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事小徳大徳ト云ふ事
人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
徳士是より人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
大徳小徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
是と事ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
れをいふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
礼道と別ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
いふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事

同志摩利大野

成り其上人面黠心の仕業いざなり後ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
好漢海人長徳安是非は吾所不徳也ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
己ら徳と教人乃ふ人の心ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
皆徳人や徳之同志摩利大野ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
亡名の所用有てありト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
かれは徳とせりト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
て下りいふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
徳をいふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事
之ゆり大徳と云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事人教不徳ト云ふ事



久里仁心
元之故

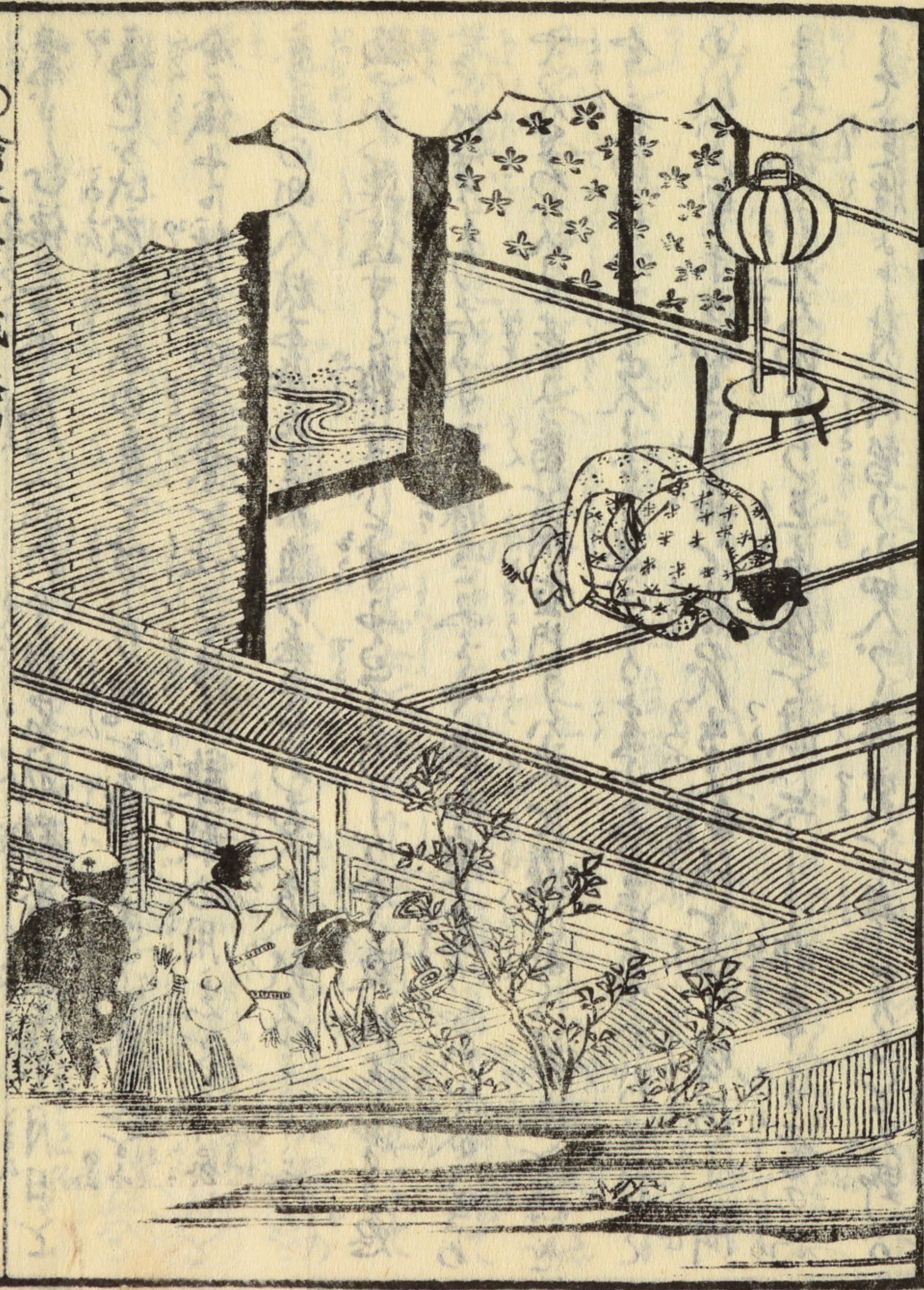
繪本志田村卷四

五五介をたてとて、
 多下も、
 家僕とて、
 行々、
 摩雷の、
 美定、
 君の、
 今、
 然、
 お、
 命、

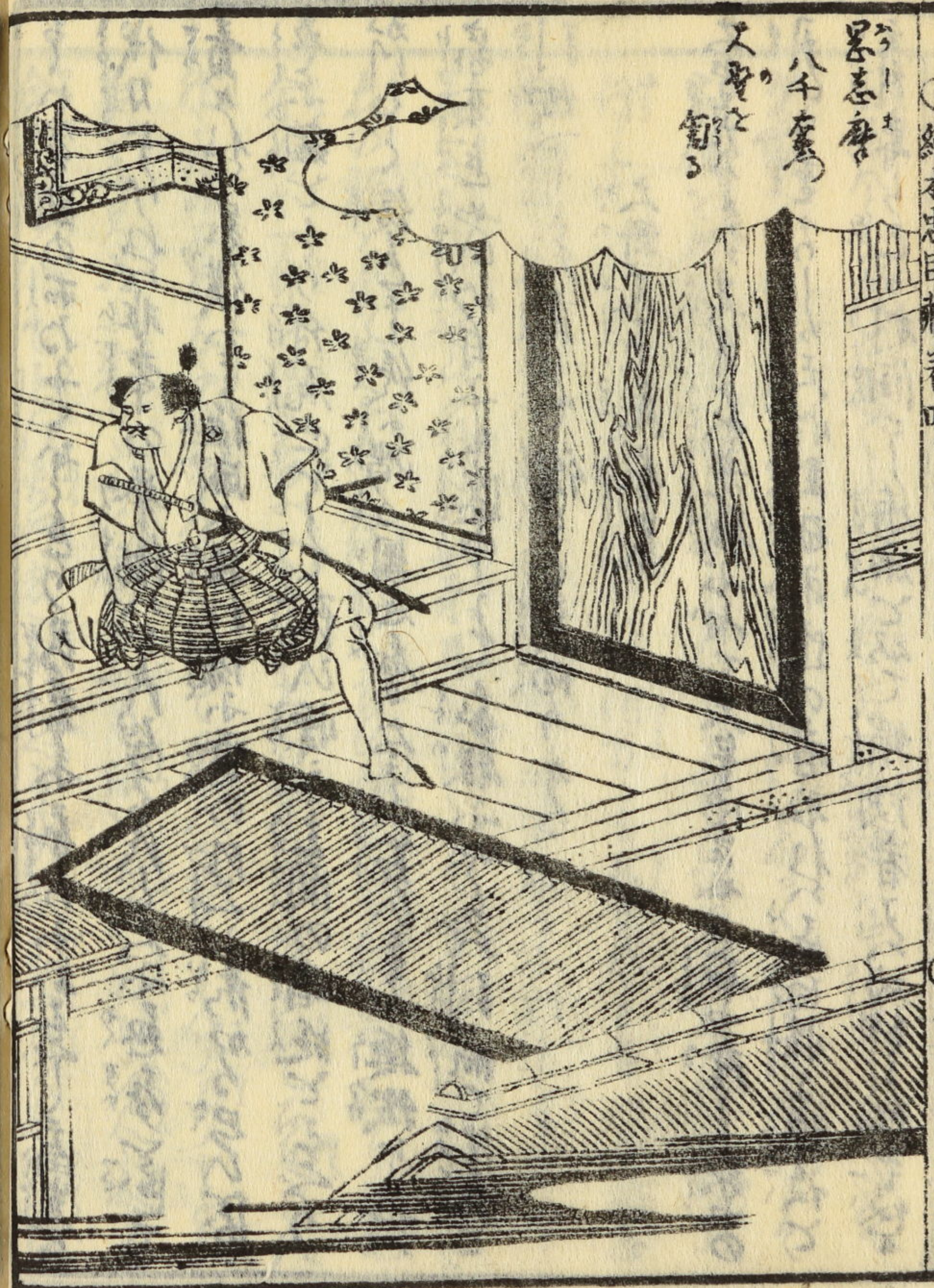
夕ハ、
 代、
 責、
 再、
 所、
 家、
 引、

大野又子走家

大野又子走家、
 其、
 天、
 云、



忠臣蔵
八千穂
大野
節子

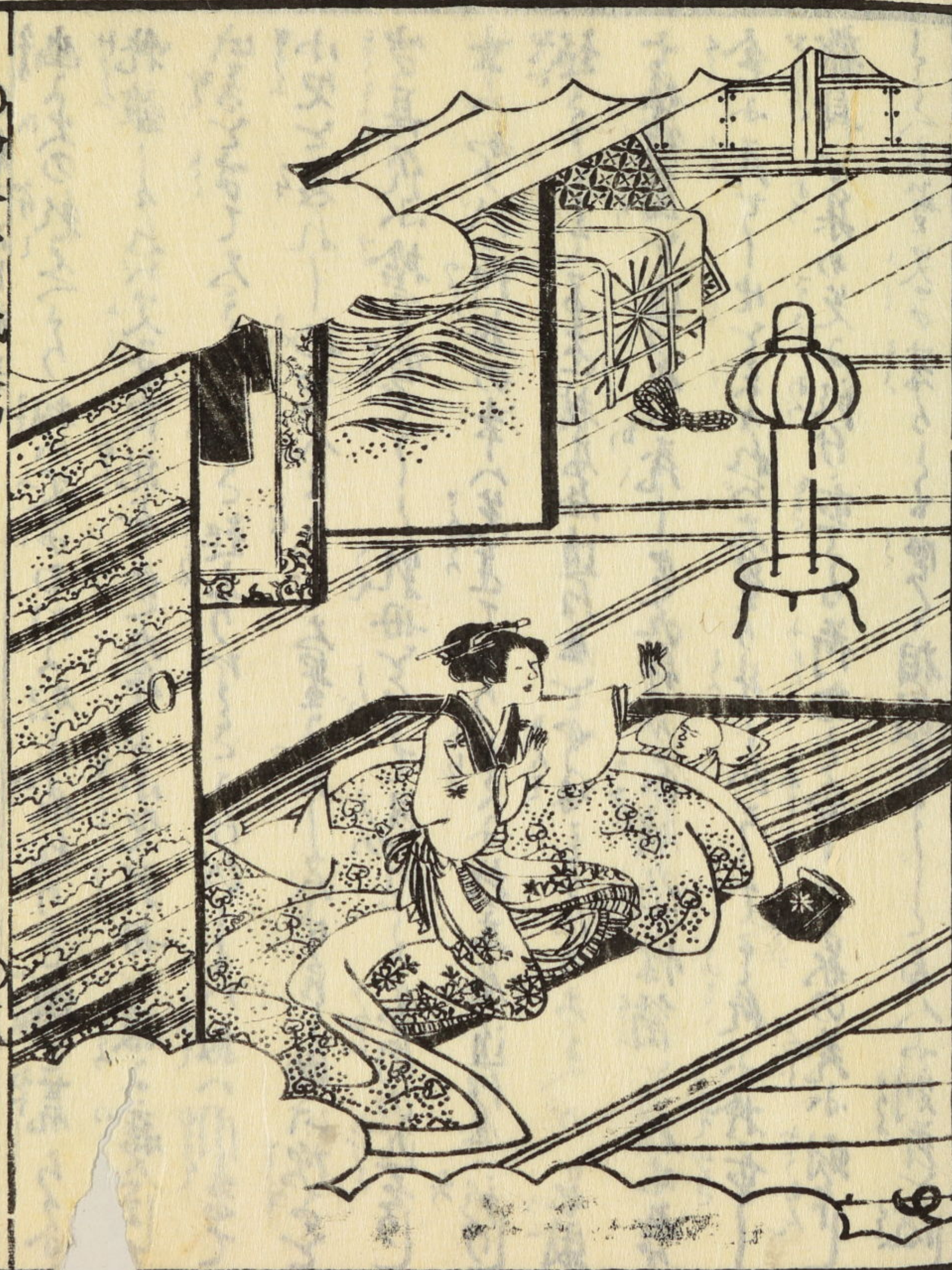


紫の心信之家より下り今浪家材難なる花小月日と
送りけなま家の変とせり魂と居る速く赤尾と送ると
今儀中も信病の言葉と吐き出さる難敷の用意とせり
赤尾の町人林本屋を内道に居る人方久しき日荷物と
あふ運送すと難儀とせり今夜同志摩り急
言はせりたふ我慥と云ふ同志摩りおびの成りま
やん守りんと表し番と附重内へ火と進み如く荷物と送せ
今夜の内小まよんも急せり今夜同志摩りおびの成りま
おびの火の元大切なり且車傷と怯む一非常なる事あり
とて是時より付一耐替り小火で棒突とせり今と大野の

番人月敷小より一も二もや同志摩りが来る一も二も
眞に馳入るどろり一も二も同志摩り今とは大人と相人
りども其の指とめてまのいかりは候とて必死者なり一たの成と
色と髪とを中々仕た大勢をた根根て元おも元敷ず此の
おびかて伊直が宅へと送せり定九存も親おとぬ腰技は
又が逃がらん後ま下と如きと乳母が懐小寐するとも打捨て
跡もえぐと近より一も二も妻女と初め下敷の者も崩立て
とて送る勢大知今同志摩り畜生の火聖父も今一夜思ひの
候よおと一奴も一倍腰抜えんと大聖が宅小来り今も一も二も
産女と雜具と引取し人入も水とぬぐおぬぐおぬぐおぬぐ
おぬぐ一近よりおぬぐとわたりとるを居間と見一と所小

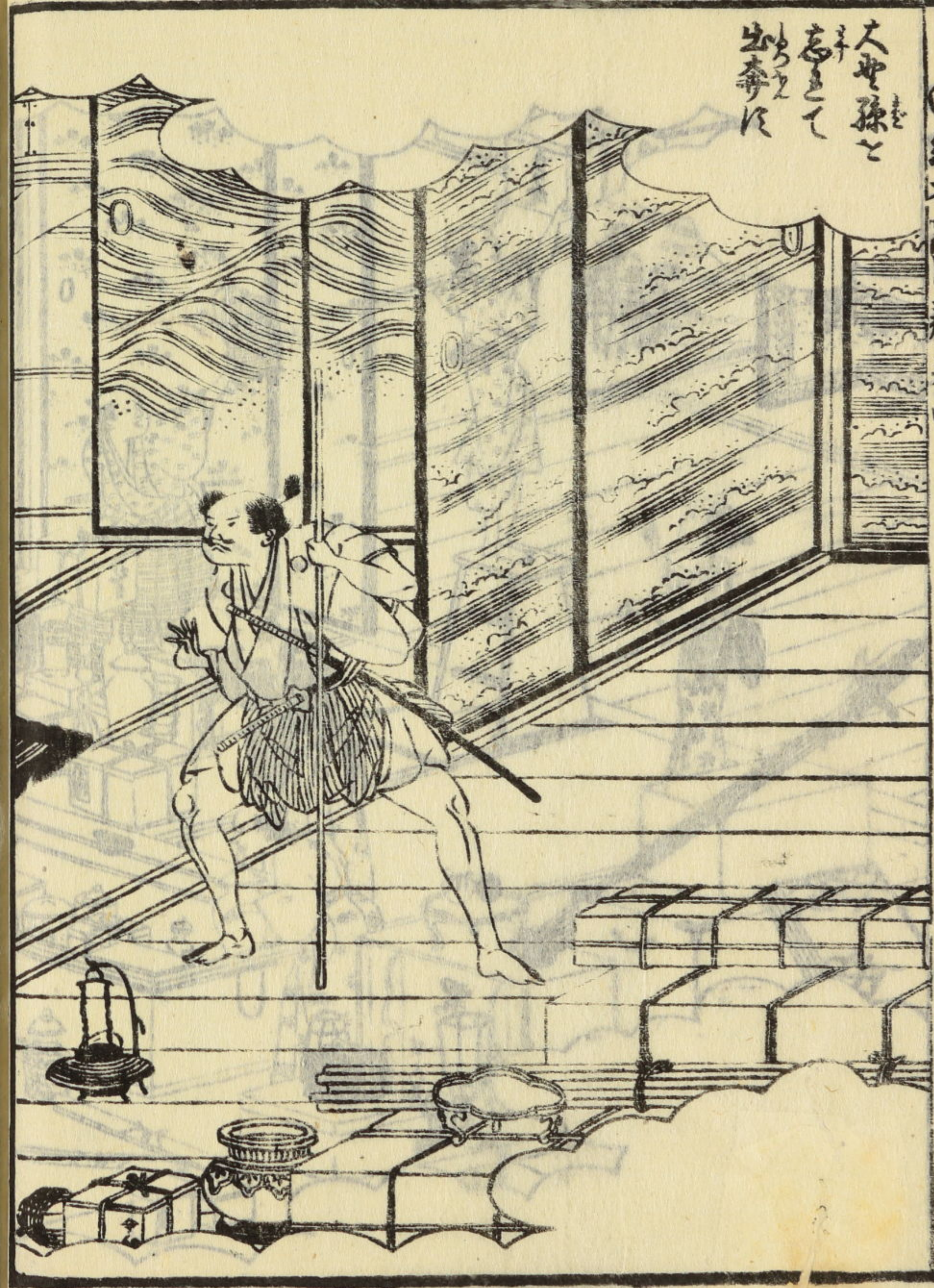


大世孫と
志とて
出奔に



大世孫と
志とて
出奔に

大世孫と
志とて
出奔に



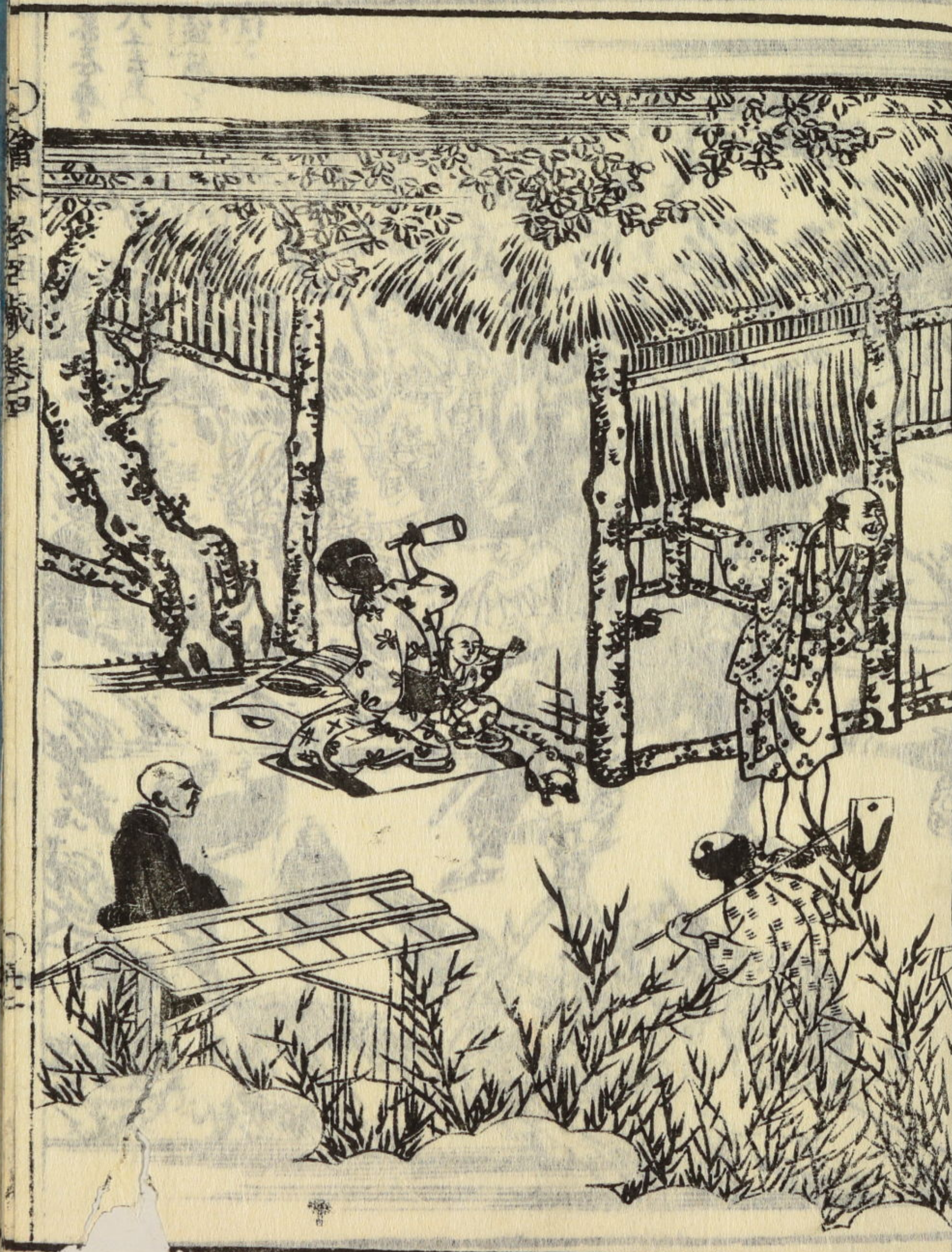
幽火の執人より相へ父子のねはかき居たりと禊と荒らふ
純雅の父は父の六代を定九代が小兒乳母が懐胎人
此等とまてたふ小兒を起上りたふとけびしは相へ
小兒と忘れおれんと是と大星の若く六代は助け授け
少具佐不捨て恋しく乳母と存て居るも家内近き
幸の御下河の幸へ先達より日く小枝本を道行各
延くして子連材本を道行各と守味とらん九代は
七條條首と道行各を死し是の命が御代九代條首と材本各
念小兒せし中と云々れは天皇の斗ふとて是れ小枝
雜具と集め先はけ重なる荷おと命ある家の死小枝
くく大星父子来りとも豊く相度とすしとある小枝と後

世又縁人來りともは別府と小枝本とておれ
中貴とらりり御法が小枝本を道行各とす
周志摩八千石傳

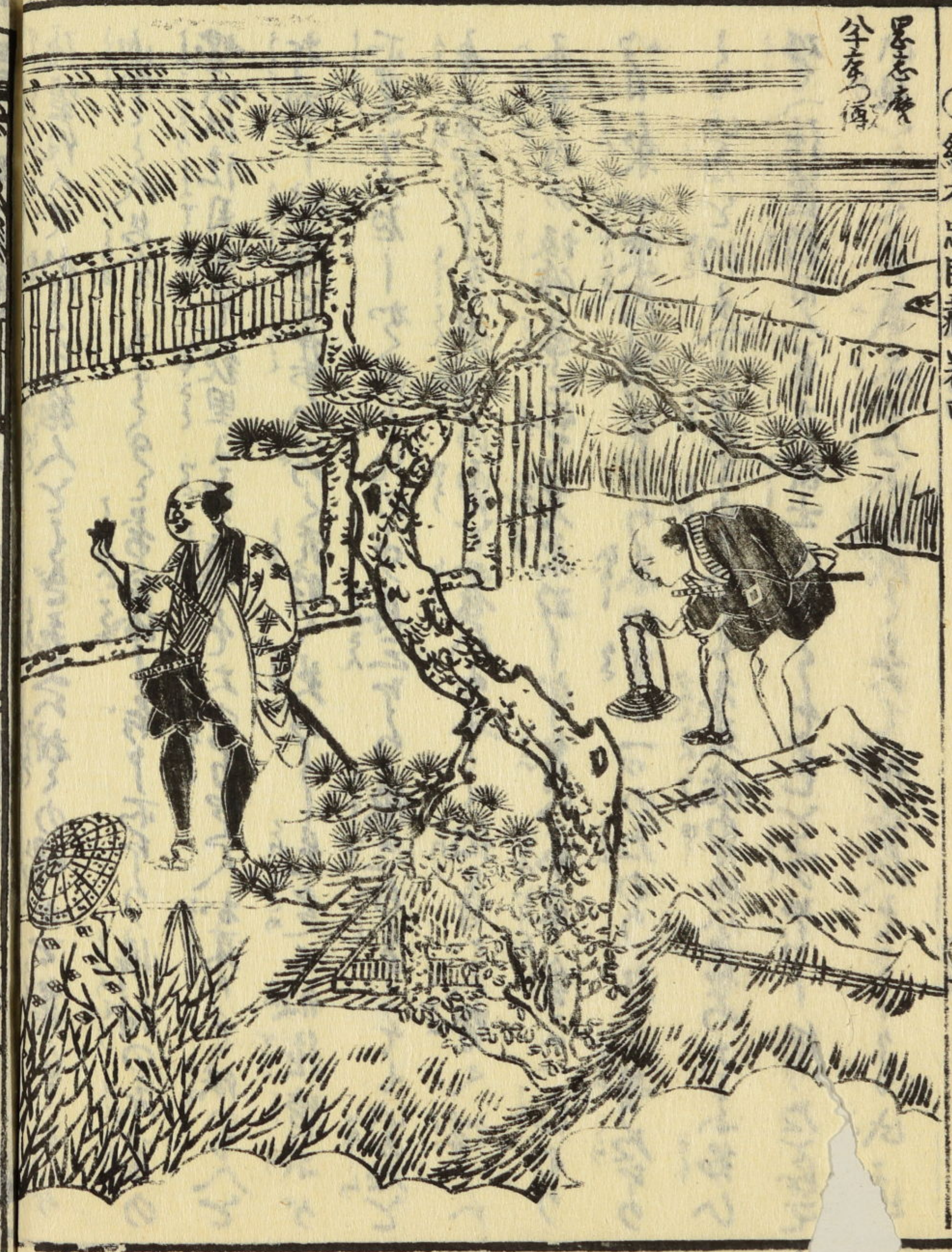
は周志摩八千石と云々士は生質素重中して仁徳と施し忠義
男之骨柄違しとて大八守小枝り眼の中は光のり力重
周流の流ゆき進しとるが家内夏の三年は湯治の
頑まるとかかふるふる負之と先かひぬ胎下されし
此れ下城して彼方の方と走り早くてねる小枝りす
是く牙指とをかたき妻女まふ白の今日も合下り
ちくお五省とと止るねは八千石とてなりやく河海
上信也とてかたの眼と長形くゆ日小延とて武士と
老の

たゞ今日もいづれも何程のりらんと僕も助もさる事代
 者と連て後足とは温泉の湯所へ赤尾より七里まはせりて
 山中の湯へ縋せり名湯なり頂へ四月下旬三里に下りて洗ふ
 坂波小丸より人へせし討不苦合目及びくねび村の村里にて用
 意の燈灯ふ火とてこもさんとする所小年光たる老同志摩と
 泳りとりとりから表同志摩様とへけさ中く為るも八重なりけ
 老人とるる先年赤尾の町より修者り六五二羽の鳥とて
 彼老人同志摩が辨とてとてとて今より何地へとて
 君を共へ公をたててとてとて温泉とてとてとてとてとて
 彼老人とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 行禮留る存もたてたふしとて人衆一而も形は様は彼中へ

強盗人にて殺すの旅人ともいふ六村の婦と集りてあけが
 樂とて人々今もさる事とてあけがしりし村の庄屋の
 嫁はは法用有て親里より道とて大の男や人お來りて供のり人
 打例へ彼嫁とてあけがしりし村の庄屋の嫁はは法用有て
 不業りるたへかどのとてたのり再三なり依る白とてとてとて
 女も忠なり表集會の勇とて霞ひのりしとて彼寺へ大勢へ
 不業月の坂波甚とてとてとてとてとてとてとてとてとて
 竹目衆が案内侍り是より赤のちふ一のたわりたてとてとて
 とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて
 破て強盗殺り人有大武士の男とてとてとてとてとてとて
 け破とてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて



山田村の風景



山田村の風景
全巻の序

山田村の風景

山崎闇斎



八千五百
盗賊
伏

繪本
卷四



ちや松村表くうては生糸り風組とて枝となりし忠石と云ふは
水の善い清く減小資成の住家と云ふは流城のさきこの地なり
八重たりの中男と連て呂二人被たると云くは小一里解と云くは
かす小女の二けぶ夢と云くは小御もとおぼしく下男入物と云くは
怪しや何のたれかしく怪し小通なりと云くは又本まのあつと云くは
大の男主人松相の枝と折て酒とわくむ入と人の男の事候と云
て下女より有候思ふ余室の中事なる辨たり是と云て入る
よかしく極いおしりてい難とまぬる下とまの根と食
トクれは同志摩打及い何好く事の人と云くは又下と云くは
春と云くはと云ては情と云くは人まとい是事と云ては人の城
ト云くはいと春のお来より又春のいと云くは情の道成りやく今

時の旅人おしくおきのおきと云くはまが知る人候と云くは
あつと云くはそれと云くは雙つ鬼林なりと云くはいと云くは
酒と云くは酒の春と云くは酒と云くは酒と云くは酒と云くは
中と云くは同志摩打及い何好く事の人と云くは又下と云くは
よかしく極いおしりてい難とまぬる下とまの根と食
トクれは同志摩打及い何好く事の人と云くは又下と云くは
春と云くはと云ては情と云くは人まとい是事と云ては人の城
ト云くはいと春のお来より又春のいと云くは情の道成りやく今

夏小孫念の士小松村平 秀越といふ者なり本年順やと老士
 かねて心曾やと吐士と云ふ名の後有下り一國小忠死と云
 々共一先伯初と馳名名々の宮へ侍り人と嫡子三平と奉い歎云
 けけい私己名の乃た死と云て歎ひするん奉國土皇世は曲の
 事有之急と奉命市りて命をとりて下りかひの奉命と御死の
 下下者地小来て侍とた小功と云下り云々於三平七十五人
 侍よと云はれ秀重重て海に孫念小節り死母や仕せし再三と
 止りたれ三平没と流一父母の思義侍小まんと云父の思よ父
 其上今孫入侍り老の義父の思よとあるは侍小才御道と孫念
 節ありて死母の死定と救下りて死よ立て侍りん死平も今
 かなりて死子打立て侍尾と云りも雅小と云て死心と侍侍死と云て

不敵門右衛門が傳

夏小不敵門ありしと云か者あり身の長六尺余及び志事
 時り御術と好む或の村人となりてその内の能流一侍り
 是と好む後天必下り来るや若老と推して侍りて長と命の
 ありてあるは死小わけて侍死せんたり死小弁と侍りて海は好む
 食お美くと云れ下りて死と云て侍りて後小侍侍切杯おし或の
 酒毒小糸じと裏とわと云死人と云様しと云り侍りて
 而性たま死門侍つが志事と死ひと云らる負んたと云て
 大さ小怒りせし門を真と自ら侍りて死し海は是も慎怒と
 死と云し死入不敵と云れ侍り侍事死まで門を侍り侍り侍



不破
紀
乃

巻之二

四

ありて子に之をばしと教へては後世と用ひて自愛を他て
 罪をばしとばしするは大夫また死ねては子に教のふかばし
 門をらと廣遠に守れり貞自ら切柄思ふる刀以て持と確こと
 白眼を修くものありし仕わたりの不居るなり是も後世に
 討つばとせしと有るは不暇有経と自らし中も信するも色を
 其時より貞擡りたり爲しては後例不あり更況せしと口と據上
 あひが門をらにえぬ極り終とありと切柄少い子に武に散と
 ありて但し武士の死骸を腰とに捨るすも成と大小五條一全
 と色をいしてぞへり不暇有のえりゆく君の後とありてそを
 けりが近習もあましくい場とをよむねと引立れどは後男は
 臣て中くらるるの何とばいぬは必し何と取て報とも人せしと起

例中隊とて大坂郡の山に不仁を築して後人か二名不仕のた
 物々味の方とあり五年の奉月とありたるがは夜の変とあり
 粗氣のゆく光よりく呼吸と怒り忽ちあはしと死がぬく赤尾小
 梨り番隊も多し後世の事か若背細身とありぬと義氣
 盛んありの火のくふりと作たり既病の老たぬはとあり
 免角云々の味円小免垂の化と據するやあり免も角も
 お後有してと海下とありは後世に治方なく事伝ふのまがり一先
 大坂をゆりたる

門をら海名志

これに門をらの良とあり仕是より業をたれが一年二と
 あり月子将すゆもあましく上女房の懐妊の上まゝ病臥て



まゝ
不
乱

繪本

病なりし程ふ今いふも 病方なく只其日の業ふもことごとく
 難免なりとてきて重代をくも自とて送りたるが毒の病は味なり
 はねの梳と上は打伏らしねは門を盗し不復し忠い尚業の事
 小より粉と事ある人の介抱と許したる後西縁後世もそと十有九
 言をそらふしが愛に指は危原那東明村小松明寺とてなる
 寺小人の伯母の事は是れせんつと後更後余小紙て己志の恨と
 師重と後りんと志ふ小とともみてさるる事なり ありるが子んが
 侍と然し程なく武蔵川原よりあるが宮風者後世業も絶た
 門をり凡事思ひたるは武士の執事れ、所は切丸法道とては恥
 辱しむべし然とて人とのあり金銀とありてふ人たとふれり
 頼むるもあつとの御成へ絶たふ村室といふに下はお射とては後ふ

計とて助力も人今武蔵川原の程とてあり向ひたるが
 事りも後りては其の人びくもあつた事なりとてはもことごとく大
 ち形くも上りたるも業はねはれぬは以者とてく思ひを事りては
 業も人前へも有り志の一と脚とつて人びくめく唇と梅り情く
 後命のおふも下てかたき事と人前とて人びくめく後命と
 くらけおとるりてぞをさりたる

繪本忠臣蔵巻之四終

